



# 明石における地域史研究と黒田義隆：『明石市史上巻』刊行への歩み（〈小特集〉地域史研究団体の潮流）

宮本，博

---

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 14:139-147

(Issue Date)

2022-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481737>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481737>



# 明石における地域史研究と黒田義隆

——『明石市史上巻』刊行への歩み——

宮本 博

はじめに

明石市においては、現在『新修 明石市史（仮称）』の編さん事業を進めており、二〇二三年度に全三巻のうち第一巻（自然・考古編）の刊行を予定している。

現在の明石市域において地域の歴史を編集・刊行したものは『林崎村郷土誌』、『明石市郷土史』、『30年のあゆみ 市制実施三十周年記念誌』、『明石文化史年表』、『魚住村誌』などがあり、それらの内容を元にするともに、旧家に眠る多くの文書や史・資料類を新たに収集・検証し、市制四十周年を記念して『明石市史 上巻』（一九六〇年刊）が纏められた。これは、黒田義隆（本名・美隆）の著・編集によるものであるが、明石生まれ・明石育ちではない黒田がなぜ明石の歴史に深く関わる

ようになったかはあまり知られていない。この度、新たに『明石市史』を編さんするに当たり、明石における地域史研究のあゆみと市史編さんの先人である黒田義隆について、『明石市史上巻』刊行に至るまでを辿る。なお、明石地域においては、直良信夫や小林行雄、春成秀爾、浅田芳朗、今里幾次など考古学分野での研究成果は多いが、本稿では主に地域史の編集活動を取り上げた。また、文中の敬称は省略させていただいた。

## 一 『明石市史』刊行前史

(一) 明治～昭和十年代まで

### 1 『西撰大観 郡部』

明治四四年（一九一一）十一月に東京在住の仲彦三郎（東京文芸会員）が編集し、神戸の明輝社が発行した。その内に「明

石郡之部」が収載されている。<sup>1)</sup>

明治時代以前に著わされた旧明石郡内の地誌的資料には『采邑私記』、『明石記』があるが、それらを引用しつつ他の史料も合わせて明石地域の歴史を概観したもので、特に明石藩時代の逸話が詳しい。この書が刊行されたことにより、それまで藩士の家に伝わり、書き写されていただけの旧明石藩内の地理や歴史を一部ではあるが広く知ることができるようになり、地域史研究の原点となった。

なお、本書のうち明石藩に関連する多くの記述は、後述する橋本海関『明石名勝古事談』の内容とほぼ同様である。

## 2 明石史談会

大正五年（一九一六）十二月、垂水海神社宮司の主唱により明石最初の地域史研究団体である明石郡史談会が設立された。なお、会の名称は、大正八年（一九一九）十一月の明石市制実施に伴い、明石史談会と改められる。賛助者は、明石女子師範



写真1 『明石史資料』

学校長、明石郡長、農学校長のほか、明石警察署長宮崎俊男、儒学者で漢文教師であった橋本海関、明石尋常高等小学校校長小野重雄らが名を連

ねる。以後、郡内各地の史跡踏査や著名人を迎えた歴史講演会を概ね二ヶ月に一回のペースで開催し、大正十四年（一九二五）八月には、それまでに開催した史跡踏査や講演会の内容を詳細に記載した『明石史資料』を刊行する。編集は舞子介類館主、矢倉甫田<sup>2)</sup>である。

また、大正八年十二月には明石市制実施を記念して、明石市公会堂において「古文書 古器物 展覧会」を開催する。寺社、旧家などの協力を得て絵図・文書類を中心として石器や弥生式土器、古墳時代遺物などを展示し、歴史資料の重要性についての理解を広めた。

## 3 金井作次郎

大正八年（一九一九）十一月、新たに市制が実施された明石市の西隣、明石川西岸に位置する林崎村が『林崎村郷土誌』を刊行。村役場助役で林地区の戸長である金井作次郎が編集した。寺社の縁起や村内の伝承、漁場争い、掘割による水利についての史料を載せて詳しく記している。

林崎村は、この後、昭和十五年（一九四〇）に川崎航空機工業明石工場が開設されて重工業地となり、その後の昭和十七年（一九四二）二月、明石市に編入される。

## 4 橋本海関（橋本小六）

明石藩最後の儒学者といわれ、藩校や師範学校の教師、明石史談会の会員でもある。『采邑私記』や他の史料類には書かれ

ていない事柄を集めて記録した『明石名勝古事談』を刊行する。『西撰大観』(前記1)にある記述の多くは、自分が書き溜めた『明石事績』によるものであり、今後その内容をこの書に載せると大正六年(一九一七)十一月に記している。その後、第一本を大正九年(一九二〇)五月に発行し、昭和八年(一九三三)五月発行の第十一本まで続く。現在では伝わっていない多くの資料や当時語られていた伝聞などを元に叙述されていて、非常に貴重な記録となっている。

#### 5 野田猪左雄

昭和初期には、昭和天皇の即位を祝う『御大典記念』事業として全国各地で教師による郷土史に関する図書の編集が活発に行われた。明石市においては、大観尋常高等小学校の訓導であり、明石史談会の会員でもある野田猪左雄の編集により『明石市郷土史』が昭和四年(一九二九)十一月に大観尋常高等小学校から発行された<sup>3)</sup>。これは明石市制実施十年の記念でもあり、明石市長や明石市教育会長から序文が寄せられている。内容的には「明石市沿革」から始まり、「神社」、「仏閣」、「名所古跡」、「教育」、「衛生」、「交通」、「産業」などから「郷土歌」、「人々」にいたるまで網羅しており、いわゆる「市史」の体裁である。なお、野田猪左雄は昭和二二年(一九四七)の『明石市役所職員住所録』に収入役と理財部長として名前が載る。

昭和七年(一九三二)十一月には『明石市郷土史』(全四七四

ページ)の内容の要約版ともいえる『明石大観』(全九七ページ)が、明石中学校教諭千鳥祐倫の編集により明石市教育会から発行される。

#### 6 小野重雄

明石史談会の会員、市会議員であり、昭和六年(一九三一)十月に、明石ゆかりの人物誌『明石乃月影 上』を出版する。これは明石藩初代藩主小笠原忠真から始まり、幕末の相撲取り真龍岩五郎まで、藩主、学者、僧侶、軍人など多方面の人物三六人を取り上げ、各種の資料を独自に調べ、肖像写真や筆跡なども交えて紹介している。折り込みの「先哲居住地図」に二五人の住居地が記されていて参考になる。書名に続いて、目次には「上編」題簽には「上」とあり、続編を出す予定であったと思われるが、出版された形跡はない。

#### 7 明石保勝会

昭和十四年(一九三九)七月、『明石郷土史料』が神戸史談会幹事の櫻谷忍により編集され、明石保勝会により発行された。この会は小野重雄が代表を務める会であるが活動などの詳細は不明である。明石には郷土史研究資料として残されたものが少ない中で、明石藩士鈴木潤之助による「明石年中行事」という資料を発見したので、他の資料を加えて刊行し、永く郷土に残すことにしたと小野重雄が序文に記している。内容は第八代明石藩主松平直明が越前大野から明石へ入部以来の各種行事や慣

行・規律などを収録した「明石年中行事」が中心で、ほかに明石藩の歴代藩主時代の出来事や重臣の名前、町方・村方の概要を記した「播州明石記録」、「東播秘談抜書」、「明石名勝畧記」を翻刻したもので、明石県の「軍務入費簿」も含まれている。

## (二) 昭和二十年以降

昭和二十四年（一九四九）十一月に市制実施三十周年を迎えるに当たって、記念誌編集への動きが現われる。

### 1 明石郷土史研究会

昭和二十四年（一九四九）六月、明石郷土史研究会の第一回例会が開催される。山田貞三（郷土史研究者）・小川龍彦（無量光寺住職・民芸研究者）・鳥居與三（戯曲家）・森俊秀・黒田美隆・堀内勝人（日本交通公社明石案内所長）・上月宗夫（乙彦、教師・松尾芭蕉研究者）社会教育課長らが出席。席上、『明石文化史年表』の編集開始と広島大学教授魚澄惣五郎博士への調査・編集の委嘱が決まる。年表の編集を通して以後の『市史』編集活動へと繋げていく方向性を示す。昭和二十四年（一九四九）十月、『明石社会教育月報』四号に「明石郷土史資料」（黒田美隆）と「明石郷土史研究会記事」が掲載され、明石の歴史を知るための資料と研究会の活動が紹介される。

この会について、黒田義隆は平成八年（一九九六）七月に発行された『梁田蛻巖全集』「あとがき」にて「明石市社会教育

課付属明石市郷土史研究懇談会」と記していて、会の性格をよく表わしていると思われる。

### 2 『30年のあゆみ』

昭和二十四年（一九四九）十一月、明石市役所総務部庶務課より『30年のあゆみ 市制実施三十周年記念誌』が発行される。編さん委員は八木新一郎（市会議員）、野田猪左雄、黒田美隆ほか。行政・議会だけでなく、生活・産業などの各方面における市制実施前と後の三十年間の変化を比較した図や表を多用している。また、市制実施時の苦労や思い出などを多くの人への聞き取りを行って掲載しており、現在では貴重な記録となっている。一方、「今昔はなし」欄を設け「万葉集と明石」、「お城ものがたり」、「寺子屋ものがたり」、「明石の伝説」、「交通ものがたり」、「通信ものがたり」、「町名のはなし」、「明石の文献もくろく」などが盛り込まれていて、単に三十年史というだけではなく、明石の町の成り立ちや変化を解説しており、後の『市史』へ向けた準備版というような位置づけも読み取れる。

### 3 『明石文化史年表』

魚澄惣五郎に委嘱していた『明石文化史年表』が昭和二六年（一九五二）三月に完成し、明石市教育福祉社会教育課編として明石市が発行。明石原人の時代から昭和二五年（一九五〇）までを収録する。黒田美隆が編集に協力し、索引を作成した。「年表」であるが記載事項の多くに出版資料を詳しく記している。資料



写真2 『明石文化史年表』

## 4 『郷土明石』

『市史』の編集集中であった昭和三十三年（一九五八）二月、明石郷土史研究会の編著で『郷土明石』が発行される。中学校の副読本を前提として書かれたものとされるが、「まえがき」の中に明石の郷土史編さんに関して興味深い話を記しているので、少し長くなるが引用する。

「終戦直後、まだ戦塵のにおいがのこっていたころ、新しく社会教育課長になられた上月さんから「市として社会教育上なからはじめたものであろう」とたずねられた。……略……「それあ郷土史をこさえるべきだ……」わたし達<sup>4</sup>の共通の意見で、しかも「それは庶民を中心としたものでなければならぬ……」と記されている。明石郷土史研究会発足以前の話と思われる、当時の中心メンバーがわかるとともに、以後の市役所と結びついた郷土史研究の動きが理解できる。

『郷土明石』には著者個人名の表示はなく、目次にも項目ご

集の役割であり、以後の地域史研究の基礎資料となった。叙述式の『本文編』を加えて『市史』の完成となるが、この後、九年の歳月を要することになる。

との執筆者名は記載されていない。しかし、鳥居與三による「まえがき」から「明石の民俗」は黒田義隆、「明石・文学散歩」は多木伸（作家）、「明石のあゆみ 明石・文化史」は島田清（兵庫県主事）、この三氏による共著であることがわかる。内容は副読本用とはいえ、明石の歴史的事象や遺跡・文化財が詳細に解説されている。後に刊行される『明石市史』に直接繋がるものと思われるが、「前編 明石のあゆみ」の南北朝時代で終わっていて、続編は発行されていない。発行者は明石郷土史研究会と明石市教育委員会の連名である。

5 『魚住村誌』

なお、島田清は昭和三十三年（一九五七）五月に、明石城の巽櫓・坤櫓が国の重要文化財の指定（同年六月指定）を受けるにあたって纏めた調査資料を元に『明石城』（島田清著・発行）を刊行した。

昭和二十六年（一九五二）一月に大久保町、魚住村、加古郡二見町が明石市に合併。合併後の昭和三十三年（一九五七）九月に『魚住村誌』が魚住村誌編纂委員会（代表者は明石市長丸尾儀兵衛）の編集により発行される。編纂委員会は、元村長・元村会議員・元村役場職員により構成されている。編纂専任者の松本吉美（役場助役）が編集期間中に亡くなったため、明石市書記の石田善作が後任となった。

合併解村後の村誌編集であるため、第一章「魚住のおいたち」に続く第二章は「合併について」を設け、合併にいたった経過

の説明と事務処理等についての報告を載せ、最終の第十六章を「特別寄稿(思い出)」として、旧村内各地区九人の方々より寄せられた魚住村六十二年の思い出を掲載して締めくくっている。発行は昭和三二年(一九五七)であるが、掲載されている資料は昭和二五年(一九五〇)末を基準としている。また、黒田義隆より資料提供があったことが記されている。

## 6 『一見築港の歴史』

昭和三二年(一九五七)十月に二見港の築港百年を記念して、明石市により発行された。編集者は黒田義隆。二見出身である明石市長丸尾儀兵衛が序文と「二見港とともに」という一文を寄せている。五八ページの小冊子であるが、地元には伝わる多くの資料を収録しており、昭和二六年(一九五一)一月に明石市に合併した二見町の歴史であり、「二見町史」でもある。

## 7 明石城史料展

市制四十周年を記念して明石市主催による「明石城史料展」が昭和三四年(一九五九)十月二四日～二九日の間、明石市民会館にて開催された。「明石城図」、「明石町図」、「明石城居屋敷郭平面図」などの絵図をはじめ、代々藩主による「地子免許状」、「采邑私記」や「明石記」などの史料類、甲冑や火縄銃などが展示された。多くの市民が来場し、郷土の歴史を伝える原史料を目の当たりにすることができ、地域研究の裾野を拡げた。

## 8 『明石市史 上巻』

昭和三五年(一九六〇)三月、市制四十周年記念事業として、明石市役所より発行。黒田義隆が編集<sup>5)</sup>した。内容は「一 明石原人のころ」から、江戸時代に相当する「五 藩政のもとに」まで。巻末に、昭和二六年(一九五一)に発行した『明石文化史年表』のうち、明石原人の時代から明治二年(一八六九)までを八十八ページの「明石市史年表」として収録している。

昭和二四年六月に開かれた明石郷土史研究会の第一回例会以降、ようやく「市史」を現実のものとして市民に提供することができた。明石市長丸尾儀兵衛は刊行のことばの中で「上巻につづいてさらに下巻と資料篇の続刊を考えております」と今後の市史刊行計画を示し、凡例では「本書は、明石市史全三巻のうちの上巻」と記している。これにより、市史下巻と資料篇の計画が市民に対して明らかにされ、市史編さん事業が継続されることになる。

## 二 黒田義隆

### (一) 黒田家と「美隆」

黒田義隆という名前は、昭和二六年(一九五一)頃から使われているが、本名は黒田「美隆」。「美」を「義」に変えた明らかな理由は伝えられておらず不明である。なお、晩年において

署名「黒田美隆」平成10年(1998)、90歳頃  
写真3

も贈呈本などへのサインは「美隆」を使っている(写真3)が、本稿では基本的に「義隆」を使用する。

黒田家は姫路地域の神社で神職を勤めた家系。義隆の祖父は高砂の神社の神職の次男、祖母は姫路の神社の神職の長女で、父は次男であったためか、鉄道院に勤め、後に駅長となる。母は神戸垂水の神社神職の三女であった。義隆は、明治四一年(一九〇八)一月二八日、父の赴任先であった石川県松任町にて誕生。のち、福井県へ移り、県立福井中学校を卒業する。神職の家系であり周囲にも神職が多かったことから、昭和二年(一九二七)国学院大学高等師範部に進み、昭和五年(一九三〇)三月に卒業する。

父は鉄道院を退職した後、福井に住んだが、明石織田家に嫁いだ娘(義隆の姉)の隣家で暮らすことになり、昭和六年(一九三一)明石へ転居する。

## (二) 神職

国学院大学を卒業した義隆は、昭和五年(一九三〇)四月、明治神宮(東京)の実習生に採用される。その後、昭和六

年(一九三一年)の諏訪大社(長野県)勤務から始まり、八年(一九三三年)伊和神社(宍粟郡一宮町)、十一年(一九三六年)広田神社(西宮市)、十九年に再び伊和神社へという移動を重ねる。昭和二十年(一九四五)八月に伊和神社で終戦を迎えるが、九月には神社関係職員の削減という方針を受けて神職を退職する。昭和二十二年(一九四六)十月、宍粟郡一宮町より、母が居住している明石へ転居する。(父は昭和十二年に他界している)

義隆は、広田神社在職中に『官幣大社廣田神社年表』をはじめ『官幣大社廣田神社末社祭日設定二関スル考証』、『官幣大社廣田神社脇殿ノ位置二関スル考証』など多くの報告書を纏め、兵庫県や神祇院、内務省に提出している。<sup>6)</sup>

## (三) 明石にて——市役所職員

神職を退職していた義隆は、周囲の人の推薦もあり、明石市役所に職を得、昭和二年(一九四七)二月から勤務を始める。最初の部署は税務課であったが、本人の性格とは合わなかったために上申したようで、しばらくすると選挙管理委員会へ移り、その後、観光課や秘書課で郷土史に関する仕事を担当するようになる。<sup>7)</sup>

戦後の復興期である昭和二三年、翌年に市制実施三十周年を迎えるにあたり、修史事業として「明石市」三十年の記念誌を計画するが、市役所の三十年史ではなく、広く「明石」の歴史

をまとめようという機運が高まりつつあった。丁度その前年に黒田義隆が明石市役所に入庁しており、大学や神職時代に培った歴史資料への造詣が認められ、当時から「郷土史研究者」として紹介されることもあり、昭和二十四年（一九四九）に発足した明石郷土史研究会の例会へも出席し、『30年のあゆみ』の編さん委員となる。やがて昭和三二年（一九五七）から市史編さん業務に携わり、長い道のりを歩み始める。

昭和三五年（一九六〇）ようやく『明石市史 上巻』の編集を終え、昭和四三年（一九六八）三月に明石市役所を定年退職した後も、引き続き市史編さん業務に従事し、昭和四五年（一九七〇）十一月に市制施行五十周年記念の『明石市史 下巻』を刊行する。さらに、昭和四四年（一九七九）からは「市史資料篇」の編さんに従事し、平成三年（一九九一）三月までの間に『明石市史資料』全八集（十三冊）を刊行する。これにより、『明石市史』は上巻で丸尾儀兵衛市長が表明した計画通り、上巻・下巻と資料篇を三十年の歳月をかけて実現させた。

また、黒田は『明石と芭蕉』、『史話明石城』をはじめ、明石の歴史に関する多くの図書・雑誌に執筆したが、特筆すべきは、昭和二七年（一九五二）七月〜十二月にかけて『神戸新聞（明美版）』に「明石史蹟とところどころ」を百回連載した他、明石市の広報紙『市政だより あかし』に昭和三二年（一九五六）八月〜平成十五年（二〇〇三）六月まで、実に四十七年間、

四百六十二回にわたって「明石の史話」を書き続けたことである。市民に明石の歴史を分かりやすく伝えるため、長年日々研鑽を積み重ねてきたことがわかる。

役職としては、明石市文化財審議会会長を務めたほか、昭和五十年（一九七五）九月に結成された市民による歴史グループ明石地方史研究会の会長も務めた。

平成一八年（二〇〇六）十月二十四日に九十九歳で亡くなり、播磨町の阿開神社社地にある黒田家墓地に眠る。

おわりに

明石における地域史研究は、幕末期に橋本海関が諸方より入手した文書類を書き写したり、当時、巷で語られていた昔語りなどを書き記したことに始まる。さらに、それらの記録をまとめ、『明石名勝古事談』という書物の形で公表したことが、以後の地域史研究に大きな力となっている。大正期には橋本海関をはじめ教育関係者を中心に役所関係者や文化人らを加えた史談会が結成され、活発な活動が展開されるが、昭和十年代に入ると、このような史談会活動は停滞した。

その後、「戦時期」という空白期間があったが、戦後間もない頃の市役所社会教育課長たちの会話により、明石市の郷土研究が再スタートすることになる。



写真4 橋本海関墓と黒田義隆（昭和27年1月27日）

三年（一九九一）に完結した。この間、黒田は明石の地域史研究を市役所内部から牽引していったといえるであろう。

明石市の周年事業は「戦時期」であった二十周年（一九三九年）を除き、十周年毎に『市史』に相当するものを発行してきた。四十周年記念となった。四十周年記念となる『明石市史 上巻』刊行時（一九六〇年）に当時の丸尾市長が明らかにした『全三巻の市史刊行計画』は黒田義隆の調査・編集によって、平成

註

(1) 『西摂大観 郡部』のうち「明石郡之部」と「美囊郡之部」を合冊製本した『明石志』が同時に出版されている。

(2) 本名は矢倉和三郎。専門の貝類研究の他に、甫田の名前で、雑誌『郷土趣味』（郷土趣味社 京都）に「大蔵谷の牛乗権兵衛」（三巻四号、大正十年十二月）、「播磨山田の葬式」（三巻八号、大正十一年八月）、「明石名物菓子由来」（三巻十号、大正十一年十月）などを寄稿しており、明石地域の歴史研究者でもある。

(3) 昭和五年（一九三〇）に発行された増補再版の書名は『明石郷土史』。

(4) わたし達とは、堀内勝人・小川龍彦・鳥居與三のこと。社会教育課長は上月宗夫（乙彦）。

(5) 昭和四七年（一九七二）三月に誤植の訂正や図版の差替えを行って発行された「復刊版」の奥付には黒田義隆は著者となっている。

(6) 黒田義隆が昭和二四年（一九四九）に作成したメモ「黒田美隆編著目録」による。

(7) 黒田義隆の長男、黒田美彦への聞き取り（二〇〇五年）による。

(8) 『明石市役所 職員住所録 昭和二十二年六月三日現在』に選挙管理委員会書記として「黒田美隆」の名前が載る。以後、昭和三四年には秘書課主事、三六年には秘書課広報統計係主事、三九年には企画室主査へと移っている。